

# 大雪山の素顔

だいせつざんのすがお

このコーナーでは、山岳ガイド、旭岳ビジターセンター、自然解説員など旭岳で活躍する人たちをリレーして、季節とともに変化する旭岳の旬のお便りをお届けします。

高山植物、紅葉、雪、動物など「自然の大博物館」と言われる大雪山の素顔が見えてくることでしょう。



## お花畑を守る

とうとう大雪山に短い夏がやって来た。

濃い青の夏空の下、山を歩くのは最高に気持ちがいい。顔がにやけてくる。がんばって歩いたご褒美は、溢れるように花を咲かせている高山植物の数々だ。

鹿児島に住んでいた昨年の秋、“東京都レンジャー”ならぬ“町レンジャー”の仕組みを持っている町が北海道にある。と聞いた時の驚きと興奮を覚えている。

学校を卒業した今年の春、旭岳パークレンジャーとして働くために東川町へやってきた。ここへ来て最も驚いたこと、それは「守るべき花がまだある」ということだ。それも「登山道のすぐ脇」に。なにを当たり前のことを言っているんだ？と思われるだろうか。

私の故郷鹿児島では、山に登って登山道沿いで野の花を数種見られたならば幸運だ。なぜならば道沿いの花々はすでに多くが誰かに持ち去られたあとだからだ。元々それぞれの花の数自体が比較的多くなかったことや、険しい山が少なく、人が入りやすいことなどが原因しているかもしれない。美しいから折ったのか、店で売るために持っていくのか...わずかに咲く花を見て、暗い気持ちになることすらあった。特に人気のあるラン科の植物は、いまやほとんどの種が県の『絶滅のおそれのある希少野生動植物』に指定されている。

ここ大雪山では、山へ入れば誰でも多様な花々が一面に咲いているのを見ることが出来る。花が咲き、枯れ、また他の花に移り変わっていく様子は毎日見ている飽きることはない。他の多くの地域ですでに失われてしまったかもしれない、素晴らしい風景だと思う。

ところが大雪山のお花畑も、安泰というわけではない。

不法な採取、外来種の侵入、登山道の侵食と拡大などの問題と日々私たちは向き合っている。一個人としてできることは、まず自然の中で遊び、身近な自然を愛することだと思う。この町の人々が守ってきた美しいお花畑を将来にも残していきたいですね。

旭岳パークレンジャー 柳田 蓉子

## 短歌

曾孫じゆんの琉翔りゆうしょうくん抱けばまるまると五体満足いとほしきなり  
生命の力強さを思はせて栗の花房盛り上がり咲く

空よりの一鳴線光蟻さへもこけつころげつ雨やどり急ぐ  
ルピナスをゆらせ夏風ゆく先の大樹の中で郭公の鳴く

病む夫は運命を受けていそいそとリハビリセンターのバスに乗りゆく  
さまざまの人の出逢い重ねて良き友なれば倅せ多し

雨の香を散らして夏の地下街に行き交ふ人らみなせはしかり  
衣食足りて何故心が荒ぶのか親をも殺め子も殺すとは

ひさびさに友よりの電話なつかしく過去今日と話はつきず  
深緑のしたたる道を留萌まで吾も染まりて帰り来たれり

七月の花咲く庭に紋白蝶舞いまふさまは天国のごと  
鐘の鳴る丘のしらべを聞きをれば清貧なりし時代偲ばる

糸蜻蛉ついと飛び交ふ隠り沼置き去りにせし刻を拾ひぬ  
年々にどうだんつつじ育ちゆき今年も俯うつむき満開となる

## 俳句

地の果に逆立つ北斗星月夜

帰省子の田仕事するも農継かず

遠き日の生命の御影みかげ星流る

ブラウスの背に木漏れ日のざわめきぬ

香水のほのかに匂う夜汽車かな

あやかしの闇よりほつと螢かな

郷里くにの鮎あし大番振舞いお裾分け

百代の旅人ゆきて流星群

走り星大雪やまの向うに父母待つか

金魚玉きのう生れて今日の恋

煙けいる喜雨身細くなりて迎へけり

宮坂紫雲  
杉山ひろのり  
小林露葉  
徳光吐苦  
杉山清つ  
石澤宏  
山口佐知子  
山田久美子  
澤田久美子  
松山蓉子  
秋山深雪  
青野公花

那須喜美  
瓜生昭枝  
嶋崎ミ工  
永江栄子  
岡澤敬子  
宮坂敬子  
松倉和子  
清水チヨ  
岩田ふじえ  
矢沢ますえ  
中田治子  
尾山一文子